

楽天グループの転換点とモバイル事業の現在地

2026年第2四半期、6年
ぶりの四半期純利益黒字化。

巨額の先行投資フェーズを経て、
楽天モバイルはどのような
軌跡を描いてきたのか。

最新の財務データとKPIから、
現在地と未来のシナリオを
解き明かす。



↑ +0.792

黒字化

↑ +0.964

↑ 0.811

ARPU

設備投資

↓ -0.082

↓ 0.096

負債削減

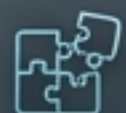
↑ +1.56

Website <https://tk-max-site.vercel.app/> • X https://x.com/TK_MA55 • Email tk_max@ymail.ne.jp

データというパズルをどう組み立てるかは、あなた次第

Neutral & Objective

本レポートは特定の結論に誘導しない、独立したデータ分析です。



The Data Puzzle

公開された決算情報・統計データという「ピース」を視覚化して提示します。



Scenario Simulation

単一の未来を断定するのではなく、条件を変えた3つのシナリオから生じる影響（ドミノ効果）を検証します。

Scenario 1:
Growth Model



Scenario 2:
Stability Path



Scenario 3:
Risk Analysis



Website <https://tk-max-site.vercel.app/> • X https://x.com/TK_MA55 • Email tk_max@ymail.ne.jp

6年ぶりの四半期純利益黒字化が示すグループ全体の底打ち

77億円

最終利益

2026年Q2 親会社の所有者に帰属する
四半期純利益 / 6年ぶりの黒字化

黒字転換

税引前利益

8年ぶりの税引前四半期利益黒字

2兆4,966億円

売上収益

2025年12月期 /
29期連続の過去最高更新

Website <https://tk-max-site.vercel.app/> ・ X https://x.com/TK_MA55 ・ Email tk_max@ymail.ne.jp

2025年のパラドックス：最終赤字の拡大と本業の過去最高益

最終赤字の拡大



主な要因：物流事業などにおける一過性の減損損失。

本業（EBITDA）は過去最高



「最終赤字は拡大したが、本業の稼ぐ力はむしろ改善している」という矛盾した決算。

グループを支える3つの柱とモバイルへの先行投資構造

Fintech (金融)

最大の稼ぎ頭

売上: 9,759億円 / 営業利益: 1,999億円

楽天カード、楽天銀行、楽天証券など強固な基盤。

最大の稼ぎ頭

売上: 9,759億円 / 営業利益: 1,999億円

楽天カード、楽天銀行、楽天証券など強固な基盤。

Internet (EC等)

堅調な成長エンジン

売上: 1兆3,697億円 / 営業利益: 889億円

先行投資フェーズ

売上: 4,828億円 /

Non-GAAP営業損益: ▲1,618億円

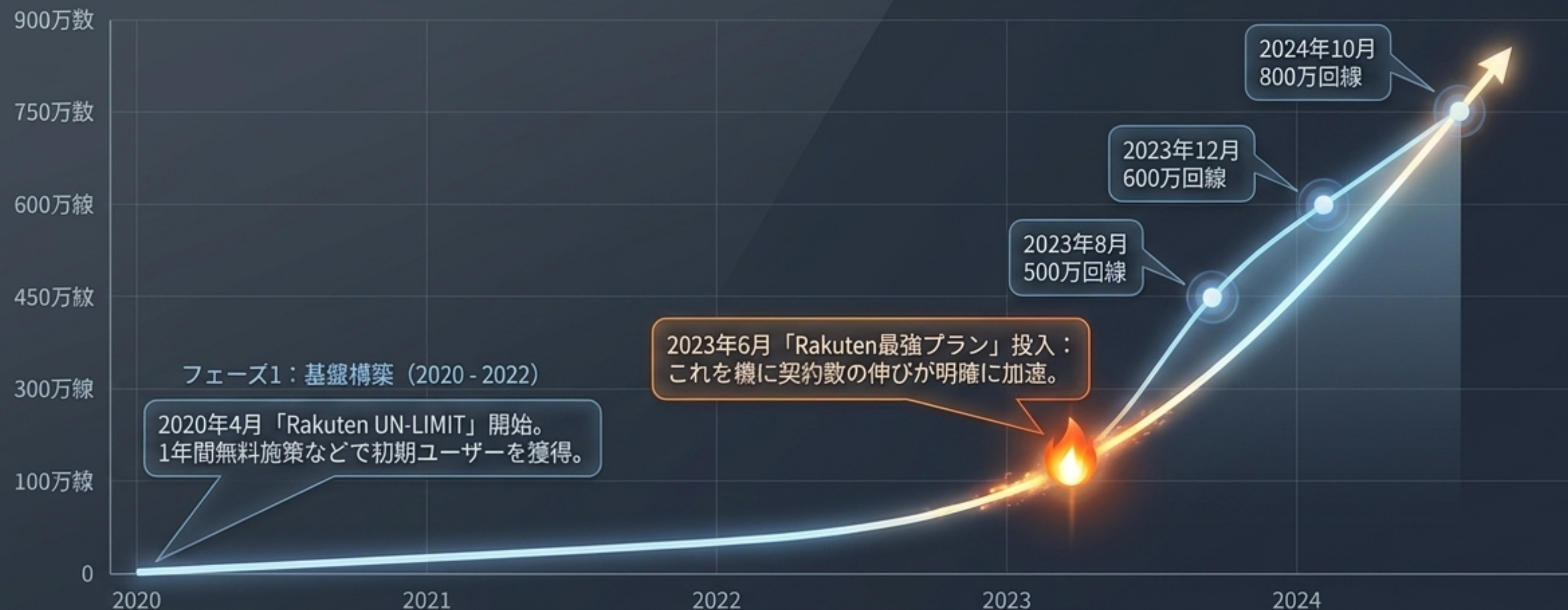
特記事項: モバイル事業単体のEBITDAは+288億円となり、参入以来初の通期黒字化を達成。赤字の「質」が変化。

基地局投資のピークと「深い谷」からの反転

モバイルセグメント Non-GAAP営業損益の推移



「最強プラン」の投入がもたらした反転攻勢と契約数の加速



Website <https://tk-max-site.vercel.app/> ・ X https://x.com/TK_MA55 ・ Email tk_max@ymail.ne.jp

悲願の1,000万回線突破と安定した顧客基盤

2025年12月、1,000万回線突破（正確には1,001万回線）

直近の到達点
(2026年6月末時点)

総契約数:
1,075万回線 ↑
年間純増数:
+178万回線

10,000,000

1.38%
Churn (Low)

解約率: **1.38% ↓**
(安定した定着率を維持)



1.38% Churn (Low)

ユニットエコノミクス改善：上昇するARPUとEBITDAの黒字化

正味ARPUの堅調な上昇



前年同期比 **+42円** の上昇。無料キャンペーン目的のユーザーから、実利用ユーザーへの質の転換。

モバイル単体の通期EBITDA黒字化



通期実績で **+288億円**。会計上の減価償却費等を除いた「現金を生み出す力」において、参入以来初の**プラス**に転換。

モバイル事業の営業黒字化はいつか？独自シミュレーターの導入

TK MAX 独自シミュレーター

契約純増ペース (Net Add Pace)

+300万回線/年

ARPU上昇ペース (ARPU Growth Pace)

+150円/年

「契約純増ペース」と「ARPU上昇ペース」の2つの変数を機械的に操作し、
四半期営業黒字化のタイミングを試算。

経営陣は「恒常的な黒字化を目指す」とし、確定的なタイムラインは明言していません。

※本試算は公開データに基づく独自の簡易モデルであり、楽天グループの公式目標ではありません。

Website <https://tk-max-site.vercel.app/> ・ X https://x.com/TK_MA55 ・ Email tk_max@ymail.ne.jp

3つの未来の軌道：純増数とARPUが描くシナリオマトリクス

減速シナリオ

成長ペースが鈍化した場合の保守的な試算。

現状ペース 継続シナリオ

直近のトレンド（純増数・ARPU微増）がそのまま継続した場合の標準的な試算。

加速シナリオ

「最強プラン」の浸透や法人契約がさらに加速した場合の楽観的な試算。

シミュレーション結果：加速シナリオにおける黒字化へのタイムライン

前提条件（加速シナリオ）

📈 契約純増数：**+55万回線** / 四半期

📈 ARPU上昇：**+22円** / 四半期



試算結果

11四半期後

約11四半期後（およそ2.8年後）にモバイル事業の四半期営業損益が黒字転換するという機械的試算。

注：競争環境の変化や設備投資の増減により、このタイムラインは変動します。

客観的元帳 (The Objective Ledger) : 楽観論と慎重論の天秤

📈 前向きな見方 (Pros)

収穫期への突入



- ✓ 1,000万回線突破とEBITDA通期黒字化という明確な実績。
- ✓ グループ全体での6年ぶり四半期黒字化。
- ✓ フィンテック事業の強力な収益力が全体を下支え。



📉 慎重な見方 (Cons & Risks)

残存する重荷と不確実性



- ⚠️ 2025年度最終赤字は前年より拡大。
- モバイル単体のNon-GAAP営業赤字は依然として年間1,600億円規模。
- 今後も年間2,000億円規模の継続的な基地局整備（設備投資）が必要。





結論は、データを受け取ったあなた次第

楽天モバイルの挑戦は、まだ途上にあるのか、それとも明確な勝利へのカウントダウンが始まったのか。
両方の視点を踏まえ、今後の四半期決算の推移を注視してください。

免責事項：本資料は公開情報に基づく独立した分析であり、投資助言や内容の正確性を保証するものではありません。
シミュレーターは独自の簡易モデルであり、楽天グループの公式目標ではありません。